



細かい部分を見れば見るほど、ため息がでるほど本格的なヨーロッパアンティークスタイル。木やアイアの素材感が存分に活かされている。アンティーク仕上げのムク床やドア、イタリア直輸入のドアノブ、映画に出てくるような造作のキッチンや洗面など、家で過ごす時間が愛おしくなるような造り。一方で、壁の漆喰塗りなど「施工参加」も歓迎しているそう。「自分たちでやればコストも下がるし、メンテナンスもしやすい。なにより、愛着が湧いて大事にするんですよね」と出戸さん。p.62・63に登場するH邸も、実は夫婦で漆喰塗りに参加したそう。



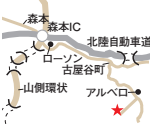
使い込んだような風合いの床や梁の色が、ずっとそこに住んでいたかのような安心感を感じさせる。こんな家なら、これからは家族の思い出を刻みながら、長く愛着を持って暮らせるだろう。

### Information



#### メーカー直輸入の雑貨も販売する デリケートツールへ遊びにいこう

全国からも問い合わせがあるという、伊・仏直輸入のドアノブやアイアン製品、リネンなどのファブリック類など、カントリーハウスに似合う雑貨類も販売。



外観は英・コッツウォルズ地方に多いハーティンバースタイル。2階のエアコン室外機を囲んだり、玄関ドアはアンティークを選んだり、随所にこだわりが感じられる。石のベンチを設けたテラスはお気に入りの場所。天窗を付け、採光も確保。

### Check point

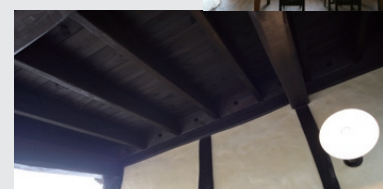


#### あえて「丸太材」を使う理由

構造材では、人工乾燥材が主流となっている現在では、丸太材を扱えるビルダーは少ない。それは人工乾燥室に丸太材をいれることができず、反りや割れなどの「暴れ」を頭ごなしに「マイナス」としているから。しかし、人工乾燥すると木本来の強さである「ねばり」を殺し、特に積雪の多い地域などでは致命的な弱さを招くこともある。デリケートツールでは、芯を持つ丸太材を自然乾燥し、材の特徴を見極めて適材適所に使用。素材の持ち味を活かす家づくりを信条としている。

#### 「見えない部分が住まいを支える」。それがわかっているから、手抜きがない

デリケートツールでは、構造材及び下地材の大きさや間隔など、手間はかかるが住まいの強さに直結し、かつ人目につかない部分にも手を抜かない。それは、「住まいが後世まで残ってほしい」から。そのため、北陸の厳しい自然環境にも耐えうるよう、時間がたつほど味わいが出てくる自然素材を用い、見えない部分にもこだわって作り続けている。



## 年月が経つほど付加価値のある家なら 心から寛ぎ、愛着を持って長く暮らせる

### デリケートツール

現在、日本の住宅の平均寿命は25年前後。それは建物自体の耐久性もさることながら、人々がメンテナンスせず、すぐに壊してしまつからだとされている。対して、ヨーロッパでは100年経過した住まいも少なくない。古い家をきちんとメンテナンスし、住み継ぐだけの魅力があるからだ。なぜ、これほど差があるのだろうか？ その理由の一つが、新建材で建てられた家は、年月が経つほど「マイナス」評価となること。反対に、本物の自然素材で作られた家は、キズや汚れも「味わい」として捉え、「プラス」の要素となる。例えば、子どもが汚しても、ストレスを感じず、心から寛げる場所になる。

デリケートツールは、そんな住まいを造り続けている。「建物を長持ちさせるためには表からは見えない構造部分に、どれだけ手抜きしないかが大事。柱や梁の間隔とか、壁の中の「貫」と呼ばれる水平材の数とかね。手間がかかってこそこそ妥協しないのは、造った住まいはできるだけ長持ちしてほしいし、時間がたつた家の方がカッコいい。ヨーロッパへいくと、「こんなものまで」というような、例えば錆びた釘なんかも、再利用します。それがまた、カッコよくて」と、代表の出戸さん。同社の施工物件へ足を踏み入れると、その言葉が実感として感じられるはずだ。

木造在来軸組工法